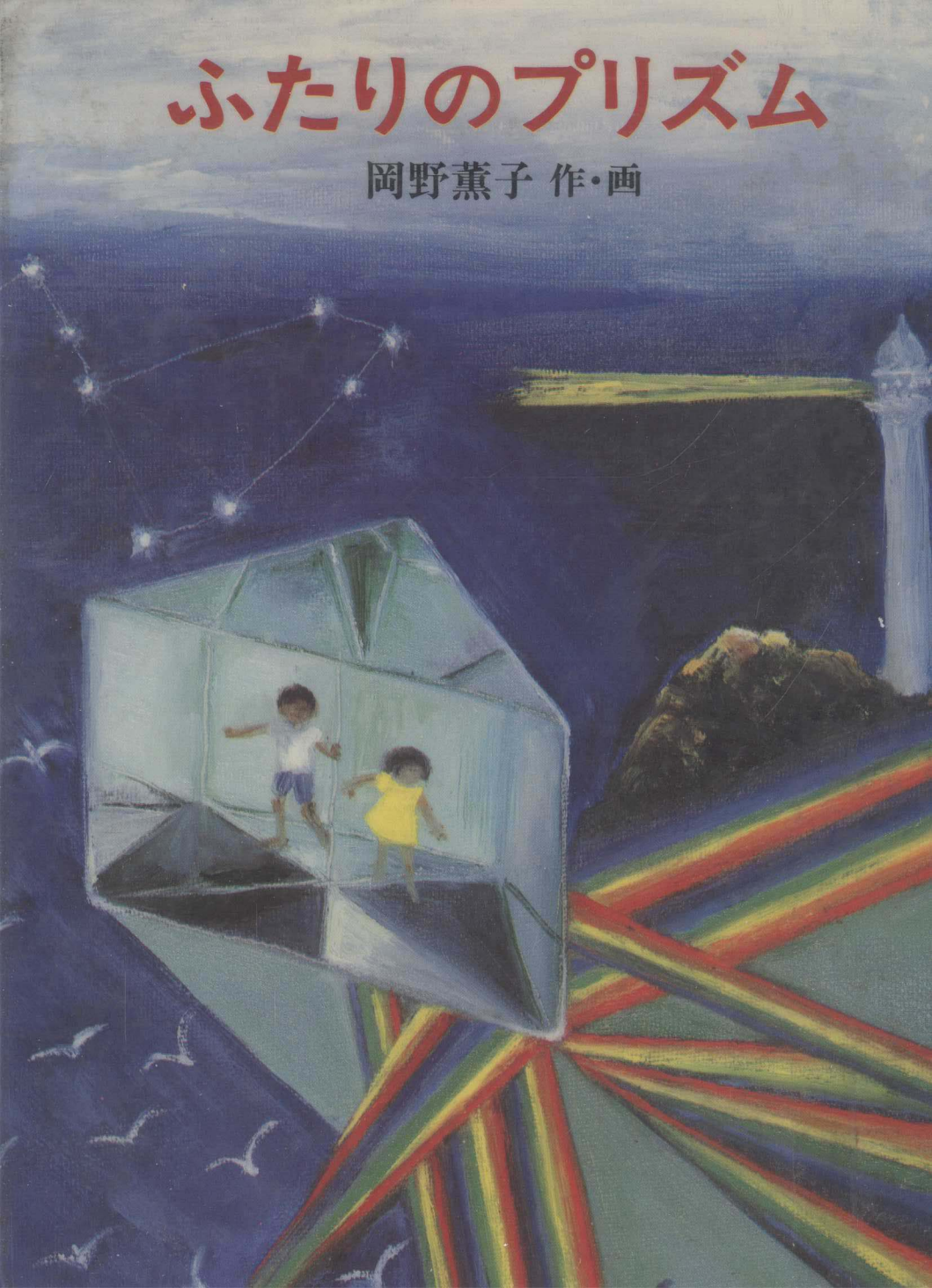
ふたりのプリズム

岡野薫子 作・画



あかね創作児童文学・14

ふたりのプリズム

岡野薫子作・画

あかね創作児童文学 14
ふたりのプリズム

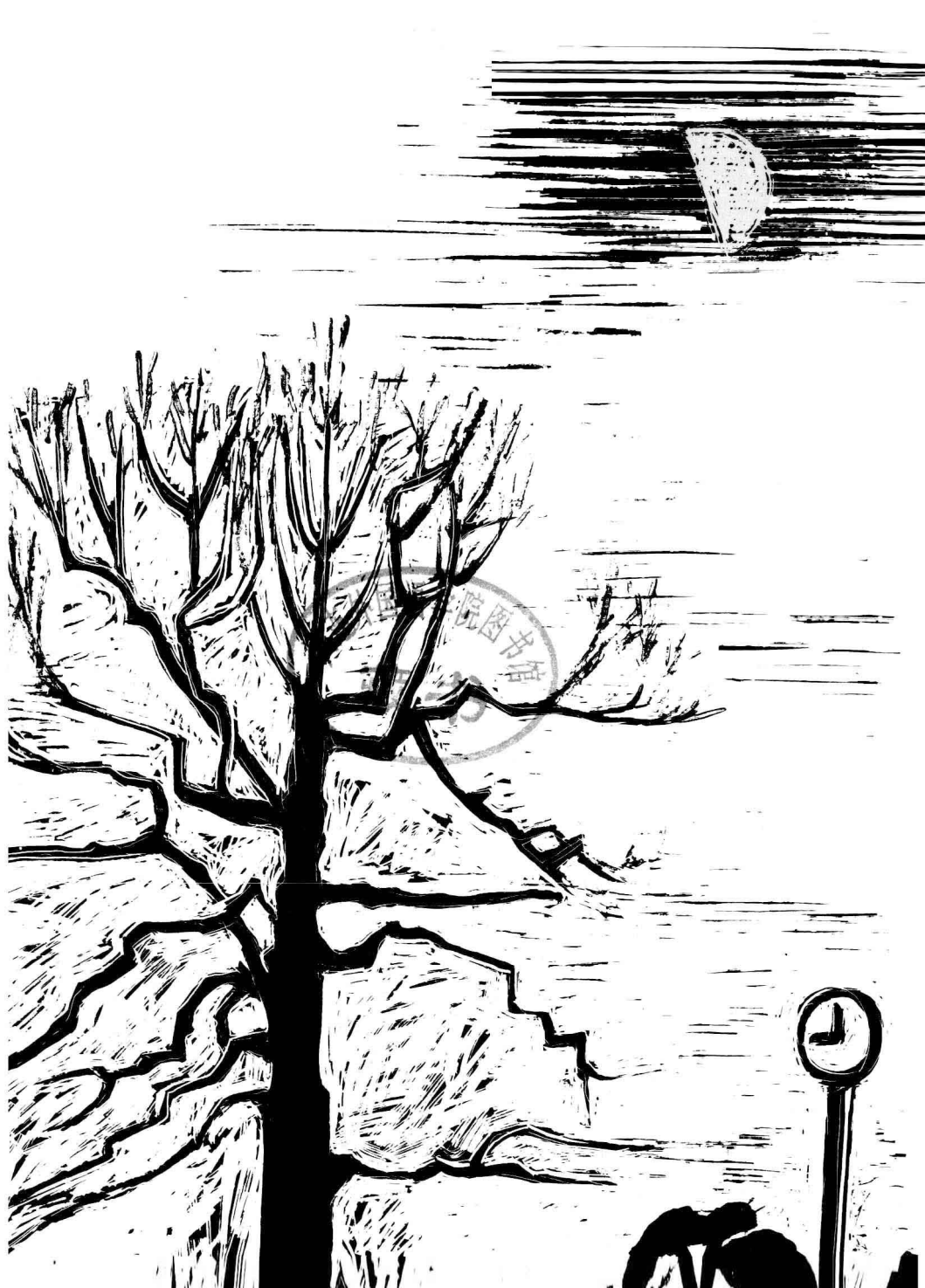
著　者　岡野薫子（おかのかおるこ）
発行者　岡本陸人
印　刷　新興印刷製本株式会社（本文）
　　錦明印刷株式会社（オフセット）
製　本　株式会社難波製本
発行所　株式会社 あかね書房
　　東京都千代田区西神田3-2-1 〒101
　　電話 03(263)0641〈代〉
　　振替 東京 3-64150

1980年4月10日第1刷

NDC 913　　8393-16714-0027

岡野薫子
ふたりのプリズム
あかね書房 1980
187p 21cm（あかね創作児童文学14）

© 1980 K. Okano　著者との契約により検印なし
落丁・乱丁本はおとりかえします
定価はカバーに表示してあります



1・ふしぎな場所 …… 7
2・昔(むかし)の時間のなかで …… 42
3・ガラスの部屋(へや) …… 78

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

4・アリの結婚(けっこん)――126
5・今の時間のなかに――174
あとがき――186

そうてい・さしえ／岡野薫子

作者紹介

岡野薫子（おかの　かおるこ）

東京生まれ。科学映画の脚本執筆をへて児童文学の創作活動にはいる。「銀色ラッコのなみだ」でサンケイ児童出版文化賞・NHK児童文学奨励賞・動物愛護協会賞を、「ヤマネコのきょうだい」で野間児童文芸推奨作品賞を、「ミドリがひろったふしぎなかさ」で講談社出版文化賞（絵本部門）を受賞。ほかに「虫は小さな天使たち」「緑のぶらんこ」「砂時計」「アナグマたちの夜」など多数。

ふたりのプリズム

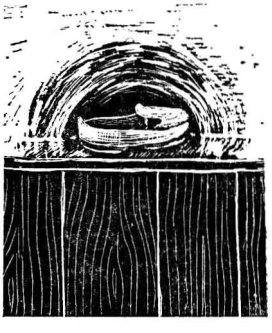
岡野薫子 作・画

1・ふしぎな場所

一

カオルの家は、広い自動車道路からせまい道にはいって、いくつも路地をまがった、そのまた奥にありました。もとは駄菓子屋だった小さなプラモデルの店と駐車場とのあいだの細い道をはいっていったつきあたりです。そこに、古い二階建ての四軒長屋が建っていて、その二階の片方が、カオルの家でした。

ごちゃごちゃと小さな店や家などがならんだこのあたりは、一方通行の道になっていて、たまに、通りから近道をしようとはいってきた車は、まるで迷路のような道すじを、ぐるぐるのろのろ走らされることになりました。うっかりしていると、また元の通りへでてしまいかねないしまつです。そんなわけで、この道路では、交通事故のおこりようもなく、子どもたちは道ばたで、わりあいのんびり遊ぶこともできました。



その日――、カオルは、クリーニング屋のヒロシと八百屋のマコト、それに、自転車でやってきていた、いとこのケンジと四人で、げたかくしをして遊んでいました。げたかくしというのは、まず、ジャンケンで鬼をきめ、鬼が数をかぞえるあいだに、自分のはいているくつの片方を、道ばたのどこかにかくし、それを鬼がみつける遊びです。鬼が、ぜんぜん方角ちがいのところをさがしていると、「遠ーい、遠ーい」とはやします。かくし場所に近づくと、「近い近い近い」とはやします。

カオルは、くつをどこにかくそうかとまよったすえ、道のきわの高い塀の上にきめました。カキモトさんの家の塀です。塀のこちらがわに、ちょうどぐあいよく、大きなヤナギの木がのびています。その木のわきに、またちょうどぐあいよく、大きなコンクリートの用水桶があります。カオルは、用水桶のふちにひょいっとのると、くつを塀の上におきました。下から見ると、木のうしろにかくれてわかりません。

「ふうん、うまいとこにかくしたなあ。」と、ケンジがいいました。

ケンジは、自分が乗ってきた自転車の、ペダルの上にくつをのせたところでした。ヒロシは、マコトが目をつむって数をかぞえている電柱のかげに、そうっとくつをおきました。そして、みんなは片足とびで、なるべく自分のかくし場所から遠ざかりました。

「近い近い。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

すぐにはやしたてられて、鬼は、あたりをぐるっと見まわしました。たちまち、ヒロシのくつがみつかりました。

「なんだ。げたかくしかい。」

かどのプラモデル屋のおじさんが、店先にでてきて、声をかけました。

夕方のすずしい風がふいています。

「意外なところにあるもんだよ。下のほうばかりさがしてたって、みつからないぞ。」

「だめだよ、おじさん。教えちゃ。」

「教えてなんかいないよ。ただのヒントさ。」

おじさんは、おもしろそうにそういうと、むかいがわのヤナギの木に目をやりました。べつに、そっちのほうをさがしてごらんと、教えたわけではありません。ただ、なんとなく、ヤナギが夕風に流れているのへ目をやっただけなのです。しかし、鬼のマコトはそれを見ると、いそいで道をつっきって、そっちへとんでいきました。

「ほらあ。」と、カオルは声をあげました。

鬼は、用水桶のまわりをぐるっと見まわし、それから、ひょいと、頭を上へむけました。

「近い近い近い。」

みんながはやします。

鬼は、用水桶のふちにのぼると、ヤナギの幹につかまって、塀の上をのぞきました。みつかった――と、カオルは思いました。ところが、ふしぎなことに、鬼はそのまま、なにもみつけられずに、おりてきてしまったのです。カオルたちは、思わず、顔を見あわせました。鬼が、自転車のペダルにのせたケンジのくつをみつけたとき、カオルは自分で、また、用水桶のふちにのぼりました。

「あれっ。」

カオルは目をまるくしました。さっきおいたところに、カオルのくつは見えなくなっていました。塀のむこうに落ちてしまったのかなと思いながら、カオルは、なんとなく片手でさぐってみました。すると、おどろいたことに、なにも見えないくつのはしが、指先にさわったのです。あわててつかんでひきだすと、くつははしから、順に現われました。ためしに、ちょっとおしもどすと、くつははしから消えていきます。

「おうい。どうしたんだあ。」

「落としちまったのかあ。」

みんなのよぶ声に、カオルははっとしました。

「あったよう。」

水用火防
Kazuko

あわてて返事をすると、カオルは片手にくつをもったまま、地面にとびおりました。
「あれっ、へんだなあ。」
マコトはびっくりした顔で、カオルのくつを見ました。
「へんだなあって、おまえのほうがよっぽどへんだ。」と、ヒロシがいいました。
「だって……、さっき見たとき、ほんとになかったんだから。」
「おまえの目が、どうかしてたのさ。」
「だって……。」
マコトは目を白黒させました。なにをいわれてもしかたがありません。カオルのくつは、ちゃんと、そこからでてきたのですから。
「ぼくが魔法をかけておいたからだよ。だから見えなくなったんだ。」
マコトはますますへんな顔をして、カオルを見ました。

友だちと別れて家に帰ってからも、カオルはなんだかぼんやりしていました。げたかくしのときの、あのふしぎな出来事は、今では信じられない気持ちでした。なにも見えないところから、くつがするするでてきたときの、あのおどろき。おしもどすと、くつの先から消えていったっけ……。ほんとに、あの瞬間、カオルのくつには魔法がかかっ

たとしか考えられません。

「カオル、なにぼんやりしてるの？　ほら、ごはんがこぼれてますよ。」

おかあさんにいわれて、カオルははっと気がつくと、はしをもちなおしました。

（そうだ。もう一度、明日ひとりでためしてみよう。もし、あそこがほんとにふしぎな場所だとしたら、くつでなくたって、ほかのものだって消えるはずだ。）

そのときのことを考えると、カオルは胸がどきどきしました。

「おにいちゃんったら。ほら、また、ごはんこぼしてる。」

こんどは妹のエミが、わきから、カオルの腕をつつきました。

2

塀の上のその場所は、やっぱりふしぎな場所でした。カオルが、そこに、本をのせてためしてみたら、本は消えて見えなくなりました。それだけではありません。本をもった手まで、その場所にかかると、影のようにうすれて消えてしまうのでした。カオルはぞっとして、思わず手をひっこめました。

カオルは用水桶のふちに立ったまま、ちょっとのあいだ、考えこんでしまいました。

（塀のその場所にあるものは、みんな消えてしまう……。っていうことは、もし、ぼく

がそこに立てば、ぼくのからだはぜんぶ消えてしまうってことなんだ。）

りくつではそうなるけれど、ほんとにそんなふうになるかどうか、まだ信じられませんでした。それに、消えたっきり、もとにもどらなくなったらたいへんです。

（だけど、消える場所はそこだけなんだ。一歩動けば、たちまちもとどおりになるんだ。）

カオルは気がついて、ほっとしました。

「こらあ。人のうちの塀にのぼって、なにしてる。」

いきなり、大声がとんできたので、カオルはびっくりして、そっちを見ました。塀のむこうがわの庭に、おじいさんが立って、カオルのほうを見あげていました。

「また、ボールを投げこんだな。」

「ちがいます。」

カオルは思わず、どなりました。いつだったか、野球のボールがそれてとびこみ、おじいさんのだいじな盆栽にあたったことがあったのです。

「そんなとこからのぞいてないで、ちゃんと、勝手口からやってきなさい。今、わしがあけてやるから。」

「いいんです。そうじゃないんです。」

カオルは大いそぎで本をつかむと、地面にとびおりました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com